Native American INDIAN STYLE

インディアン スタイル

目次

WORLD MOOK
ワールド・ムック900
平成23年12月30日発行（通巻900）

04 アメリカ・インディアン博物館にみるインディアン スタイル　河村喜代子
16 アメリカ・インディアンの現在（いま）【Q&A】　編集部
28 インディアン・コスチューム　中村省三
44 ジョージ・カトリンの贈り物<インディアンの美しさを最初に伝えた画家>　香山知子
72 インディアンのサイン言語　編集部
90 強く生きるサンダンスのペイント　編集部
78 アメリカ・インディアン部族別コスチューム　香山茂子
132 仮面に表現された精神性と創造力　編集部
140 インディアン・ファッション　編集部
156 アパッチ族の肖像<戦士・少女・シャーマン・ダンサー>　編集部
164 パウワウで出会った美しくスピリチュアルな人々　編集部
186 コマーシャル・アートに登場したインディアンたち　編集部
190 西部劇とアメリカ・インディアン　菊月俊之

TITLE: INDIAN STYLE
World Mook Series No.900
Edited by KESAHARU IMAI
Publication Date: Des. 30, 2011

Copyright © 2011 by World Photo Press

All rights reserved. No part of this publication may be reproduced or used in any form or by any means — graphic, electronic, or mechanical, including photocopying or information storage and retrieval systems — without the written permission from the copyright holder.

Book design by Lina Sugimoto(WPP Design Section)

ISBN: 978-4-8465-2900-0 C9477 ¥2667E
Printed in Japan

Published by World Photo Press
3-39-2 Nakano
Nakano-ku
Tokyo 164-8551
Japan
Phone: +81(Japan)-3-5385-8111; Fax: +81(Japan)-3-5385-5614
Email: monomag@wpp.co.jp
URL: http://www.monomagazine.com

This book may be purchased from the publisher.

INDIAN STYLE

インディアンたちに馬がもたらされて以来、移動の方法や狩り、
そして戦い方にいたるまで大きな変化があった。
部族のなかには「ホースネーション」、
馬の民と呼ばれる人びとさえ誕生したほどだった。
馬は生活を変え、文化を動かす力があった。
ネイティブ・アメリカンは馬を大切に世話し、
馬を守る道具や馬を飾る道具をつくってきた。
もちろん馬の大きな力は畏怖の対象になり、尊重され、
馬をモチーフにしたアートも生まれてきた。

「ウッズ・クリー族のサドルクロス」
Woods Cree Saddlecloth
鞍の下に敷いて、馬の汗を吸収して皮膚を保護するための毛布。カナダ。1885年ころ。ホースブランケットとしては珍しいかたちをしているが、アメリカの騎兵隊が使っていた毛布のかたちを取り入れたのではとされている。材料はシードビーズ、リボン、ウール、コットン。
Photo/Katherine Fogden, NMAI

「クリーもしくはレッドリバー・メティス族の馬具」
Cree or Red River Métis Horse Crupper
鞍から馬の尾に回してかける皮ひも。1850年ころ。カナダのマニトバ州。同心円を描いたメディスンホイールの部分は、ヤマアラシのトゲを使って刺繍されている。

「スー族のバッグ」
Sioux Bag
おそらくノース・ダコタのスー族のバッグ。1870年ころ。ガラスのビーズを使用。
Photo/Ernest Amoroso, NMAI

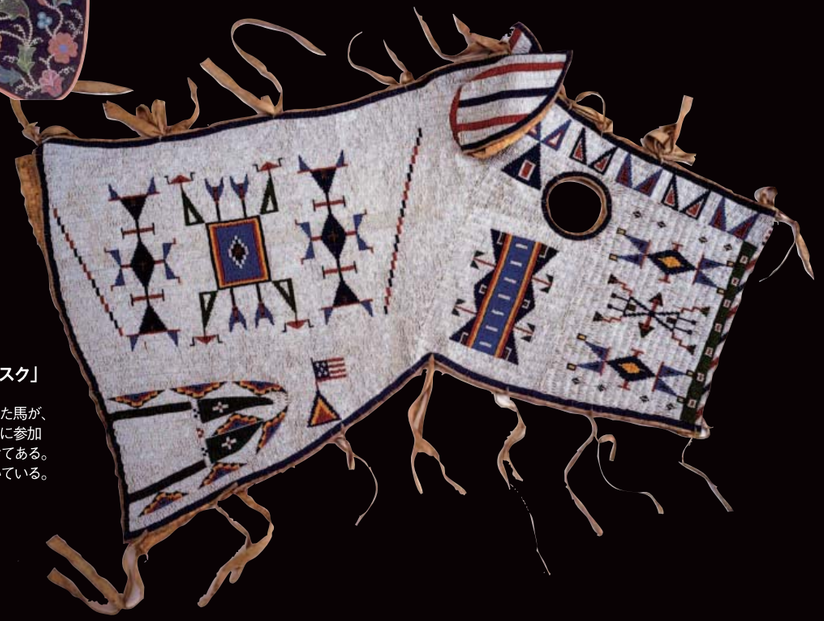
「アシニボイン族のヘッドドレス」
Assiniboine Headdress
1850年ころ。アシニボイン族はミズーリ川上流からサスカチュワン川中流域に住む人びと。アンテロープの角とシカ皮、ヤマアラシのトゲ、羽根、馬の毛などを使用。

「ガータ」
Garters
セミノール族の首長だったオシオーラのものとされるガータ。1835年ころ。ガラスのビーズを使用。

「クリー族のフード」
Cree Hood
カナダのオンタリオ州ムース・ファクトリー島に住むウエスト・メイン・クリー族の女性がかぶるフード。1840年ころ。ウールとシルクの布、ガラスのビーズなどを使用。
Photo/Ernest Amoroso, NMAI

「シャイアン族の馬のマスク」
Cheyenne Horse Mask
ヤマアラシのトゲを編んで馬の顔にしたマスク。19世紀半ば。モンタナ州。

「ホピ族の肩掛け」
Hopi Manta
1900–1910年ころ。マンタは肩掛けのことだが、ホピの人びとはブラウスの上からこの一枚の布を体に巻き付けるようにして着る。彼らのカチーナ人形やダンスに共通するモチーフが刺繍されている。サンフェイスと呼ばれる人物が中央におり、雨雲から出ているジグザグの線は稲妻である。
Photo/Katherine Fogden, NMAI

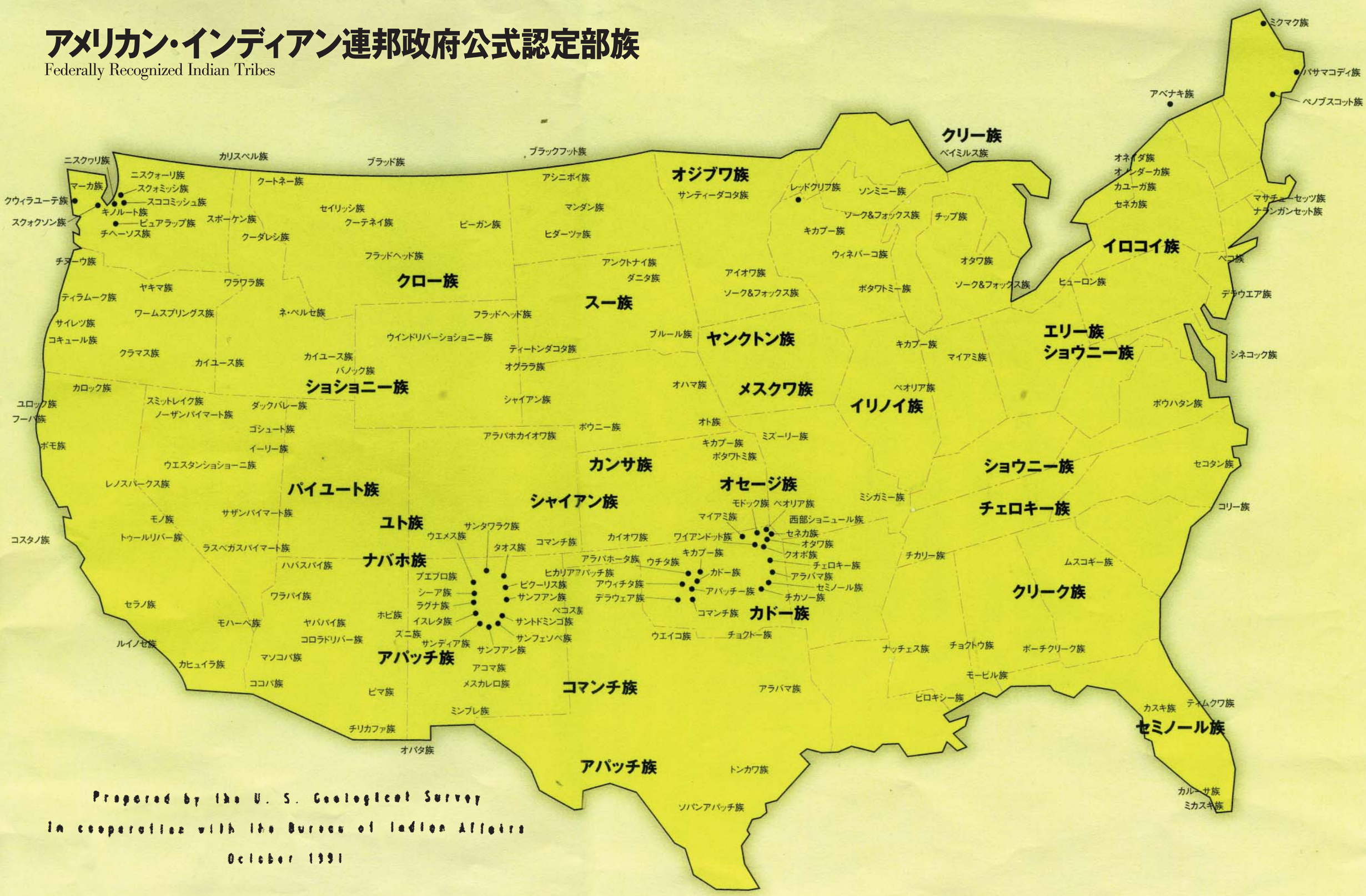


「オグララ・ラコタのビーズ刺繍の馬用マスク」
Oglala Lakota Beaded Horse Mask
ティトン・スー族のたいへんに大切にされていた馬が、このマスクをつけて1904年7月4日のパレードに参加した。全面にごく小さなシードビーズを縫い付けてある。1904年ころ。耳と目と鼻先が出るように穴が開いている。
Photo/Katherine Fogden, NMAI

「馬のマスク」
Horse Mask
スー族系のアシニボイン族のファニータ・グローウィング・サンダー・ファーガティ作。2008年。ヤマアラシのトゲを編み、シードビーズ、ブラスのボタン、羽根などを使用。

アメリカン・インディアン連邦政府公式認定部族

Federally Recognized Indian Tribes



Prepared by the U. S. Geological Survey
in cooperation with the Bureau of Indian Affairs
October 1991

Native American

Indian Costume

インディアン・コスチューム

文=中村省三

Illustrations/Library of Congress(all except listed below)
Illustrations/The New York Public Library, Rare Book Division: P.33(top right), P.40(top right & bottom right)
©United States National Museum: P.32(left), P.34〜P.37, P.40(left)

このデラウエア族の青年(23歳)の銅版画は、1645年にヨーロッパで制作されている。彼はオランダのアメリカ植民地ニュー・ネザーランド総督キーフトが起こした戦争(1643〜45年)で捕虜になり、アムステルダムに連れてこられた。イギリスで活躍していた画家のウェンセスラス・ホラーはアントワープで青年がやや左を向いている上半身のポートレートを制作した。勾玉をつなげたような頭飾りとネックレスをし、顔にはマーキングを施している。

インディアンの美しさを最初に伝えた画家

ジョージ・カトリンの贈り物

彼は“神から遣わされた記録者”だった。1830年代、インディアンたちを訪ねて北米を旅した画家は数百点におよぶ油絵を後世に残した。彼はイーゼルの前でポーズをとるインディアンひとりひとりを知的、勇壮、上品、エレガントなどの言葉で評し、彼らに対する愛情と尊敬を表した。当時、アメリカの全人口1286万6020人に対してインディアンは31万3130人とアメリカ政府の統計にある。白人たちから迫害を受け、戦いや伝染病などで激減した、自然と共生する偉大な人々が正しく理解されることを願って克明に描かれた作品は今日も我々に多くを語りかける。

構成=香山知子

緻密なタッチの油絵で表現されたインディアンたちの美しく独創的な衣服や装飾品、彼らの暮らしや風習、そして彼らが敬い、畏れ、共存する自然。1830年代に描かれた作品は、それがアメリカ合衆国の姿の一部であった、ということを即座には信じられないほど、ある種の豊かさに包まれている。そしてインディアンたちは創造性や色彩感覚になんと恵まれていることか。写真以上に写実的ともいえる油絵が描き出した世界に、失ったものへの敬意を呼び覚まされる人も多いだろう。

絵筆を握った人物はジョージ・カトリン（1796〜1872）。彼は1830年から1836年にかけてセントルイスを拠点にインディアンの各部族を訪ねる旅を5回にわたって行ない、50部族を訪問し、彼らの生活を油絵に残した。またその2年後にはミズーリ川を3000km下り、今日のノースダコタとモンタナの州境に位置する地域に住む、南部のパウニー、オマハ、北部のマンダン、クロー、アシニボイン、ブラックフィートなど18部族を訪れ、ヨーロッパ文明の影響をさほど受けていないインディアンたちを記録した。こうして彼は1830年代におよそ600点のインディアンをテーマとする油絵を描き、また1832から33年にかけて、訪問記をニューヨークの新聞に寄稿している。

ところで1830年といえばアンドリュー・ジャクソン大統領によってインディアン移住法が制定された年であり、保留地への強制移住に従わないインディアンは絶滅させるという「インディアン絶滅対策」が推進された時代だった。これによって南東部に住むチェロキー、セミノール、チョクトー、クリークなどの部族はミシシッピ川以西に移住を強いられた。厳冬のさなか1000km以上も離れた土地へ徒歩で移住を命じられたチェロキーは、1万2000人のうち8000人が旅の途中で死亡したといわれ、「涙の旅路」としてインディアンたちに語り継がれている。

このような白人によるアメリカ植民地政策が進められた時代に、なぜカトリンはインディアンに魅せられたのだろうか。

彼は1796年、ペンシルバニア州ウィルキス・バーレに生まれた。自然に恵まれた環境のなかで釣りや狩りをして過ごし、また1778年のワイオミング大量虐殺などインディアンにまつわる多くの話を聞いて育ったという。母親と祖母がインディアンに囚われ監禁された、という話も幾度となく耳にしていた。弁護士の父親の願いで1817年にはコネチカット州で弁護士資格を得たものの、1821年にはフィラデルフィアで絵描きの道を歩み出した。法律家より画家が天職と悟ったのだろう。1828年の夏のある日、フィラデルフィアを訪れた「西部の野生のなかから訪れた高貴で威厳あるインディアンたち」の一行に出会った。カトリンは気品ある彼らの姿に驚き、彼の絵描き心はその美しさに刺激されたのだった。そして即座にインディアンたちを描くことに生涯を捧げる決心をした。それは失われつつあるものを記録し、子孫に残さなくてはならないという使命感でもあった。

1838年、彼は旅を終えて東部に戻り、607点の油絵とインディアンの数多くのコスチュームやアート作品などを「インディアン・ギャラリー」としてまとめ、アメリカやヨーロッパの主要都市を巡回し、講演を行い、インディアンに対する正しい理解を広めることに力を尽くした。しかし1852年には財政難のためインディアン・ギャラリーを実業家ジョセフ・ハリソンに売却し、彼自身は南米に渡り、ふたたび原住民たちを描く旅を続けた。1871年、アメリカに帰国したが、翌年にこの世を去っている。

1879年にハリソン未亡人が500点以上の原画をスミソニアン・インスティチューションに寄付し、今日も保存される。また彼の油絵は印刷用に版画におこされ、著作『北アメリカインディアン』などに見ることができる。彼が意図したように「記録」は今日も活き活きと“1830年代のアメリカ”を語っている。

アイダホ州を流れるテトン川周辺に住むスー族を描いていると、高貴な雰囲気のシエンヌ族の酋長Nee-hee-o-ee-woo-tix（左／丘の上の狼）がやってきた。6フィートの見事な体躯を鹿皮の美しいドレスで包み、その袖とレギンスはクィル細工の幅広のバンドで飾られ、非常に豊かな髪が肩に垂れ、スー族から贈られたパイプを手にしている。彼を「もっとも美しく気品あるインディアンのひとり」とカトリンは記した。三つ編みにした髪が胸元まで下がった、Tis-see-woo-na-tix（膝を洗う女）という名をもつシエンヌ族の女性（右）もクィル細工とビーズ細工の美しい装飾を施した趣味のいい山羊皮のドレスを身につけていた。

DAKOTA

ダコタ

ミネソタからウィスコンシン西部の水辺の村に定住しトウモロコシ栽培など半農生活を送った部族。初期の服装は丈夫なシカ皮で作った下帯やレギンスと防寒用ポンチョでヤマアラシの針や短いふさ飾りがあしらわれた。ダコタのシャツは西部スー族のシャツより短くプレーンで、シャツの前後についた大きなクィル細工のロゼットが特徴だった。女たちは最初は巻きスカートとポンチョ、後に東部森林地帯の部族の影響でストラップ＆スリーブドレスが着られるようになった。装飾は革紐の列や周囲を囲むふさ飾りやクィル細工のパッチだった。膝丈のレギンスも同様の装飾が施された。モカシンは毛皮や刺繍で飾られた。儀式用モカシンは美しいクィル細工が施された。男たちは重いバッファロー・ローブを纏った。シカやビーバーの皮の軽いローブもあった。いずれもクィル細工や人物の絵で飾られた。髪型は男女とも垂らすか、お下げ髪だった。男たちは頭上に残した一房の髪に飾りをつけた。モヒカン刈りも見られた。西部スー族の後光のような長い頭飾りは19世紀末になってから被られたようだ。普通は無帽だが冬は毛皮の帽子を着用した。インディアンの衣類にはポケットがなかったのでバッグやパウチが多用され、絵の具や裁縫道具、タバコや御守りが入れられベルトに取り付けられた。ジュエリーは身近な材質で作られ、貝殻、ナッツや石がネックレスやイアリングに変身し、また動物や鳥の鉤爪が首や耳、衣類を飾った。儀式用の衣装も各種あり、バッファローやクマ等それぞれの結社のシンボルとなる動物の皮や角が使われた。衣類の装飾としてはクィル細工が典型的だが図柄はシンプルだった。ビーズ細工も伝統的ではなかった。19世紀末に北東部インディアンの花柄が採用されたが伝統的な左右対称のデザインも残された。人気のモチーフはトンボやひし形、八角星、クロスや星などで、ふさ飾りは短かった。クィルで巻いた革紐やビーズ細工のパッチを列状に並べる装飾スタイルが人気だった。白人文化との接触でダコタの生活様式は一変した。19世紀初頭までには綿布やギンガムが取り入れられ、20世紀初頭には普段着も白人と同じになり、遂には靴も履かれるようになった。銀のブレスレットやブローチ、ブリキの鈴も装飾品に加わった。20世紀に入ると伝統的な服装は儀式用の衣装を除いてほとんど姿を消した。